

鑑賞だより

NPO 法人
岡山市子どもセンター

2018. 12. 25



はっぴはっぴ☆ らくだ

2月16日(土) 19時開演 西川アイプラザ

古典落語をアレンジした エネルギーなふたり芝居です



「古典落語より創作」 脚本・演出：麻創けい子 音楽：ノノヤママナコ 人形美術：小辻賢典

「らくだ」に願いをこめて

演出・脚本 麻創けい子

落語の「らくだ」は、ご存知の方も多いと思います。フグにあたって死んだ、らくだとあだ名される男の家に立ち寄ったくず屋が、その兄貴から、「大家のところに行って酒とにしめを調達してこい。いやだと言ったら死人にカンカンノウを踊らせるんだ」と言われ、しぶしぶでかけたあげく、死んだらくだを背負って踊るはめになるという滑稽噺。気の弱いくず屋が、酒を呑まされるうちに態度が変貌するというのも見どころですが、背景となる時代を変えると、庶民の悲哀が浮かび上がります。

二人芝居「らくだ」の背景は、昭和13年。そして、らくだの兄貴分に振り回される人物も、紙芝居師に直しました。昭和13年と言えば、日中戦争のさなか、日本が太平洋戦の泥沼へと傾斜していく時代です。

子どもたちの娯楽、街角で人気を博していた紙芝居にも変化が表れました。その前年ごろから、紙芝居の絵の裏に文章を書くようになったのです。それまでの紙芝居の語りは、ほとんどが口伝で覚えたものでした。大筋は同じでも、紙芝居師によって長くも短くもなったわけです。

ではなぜ文章を書くようになったのか。「検閲」が始まったからです。大げさな言い方をすれば、表現の自由の取り締まり。言葉に荒縄をかけられるようなものです。私たち舞台にかかわる者にとって、これほど辛いことはありません。大きな口をあけて笑うこともはばかれる時代の前ぶれでした。

戦後70年以上が経ち、戦争はもう昔々の物語になりました。けれども、私たちは本当に平和を手に入れたのでしょうか。今ある平和は、砂の上の幻かもしれません。

笑いが失われる時代に時が逆戻りせぬよう、願いを込めて書きました。

現代を生きる本物の紙芝居師、たっちゃんと、カメレオン役者石黒寛、この二人にしか演じられないドラマです。

どうか、大笑いしてください。皆さんの笑い声と、登場人物の泣き笑いが子どもたちの未来に、平和の灯を続ける油の一滴になることを信じています。



落語「らくだ」を選んだ理由を、石黒さんに尋ねました。

愛嬌と哀愁を追い求めています。この話の中には馬鹿馬鹿しい滑稽があります。大真面目に滑稽を表現すると、哀愁の中に愛嬌が見えてくるんです。そんな話が好きなんです。つまり色々な魅力が詰まってるんです。



お二人が演じる「らくだ」のみどころを尋ねました。

石黒さん

●ずばり、たっちゃんの熱と私の変幻。そして、今の当たり前の生活がいかに幸せか！を感じてほしいです。

たっちゃん

●石黒さんの「一人四役」です！どの役にも魂が込められています。同じ人が演じてると気づかなかった子どももいます。僕は一役ですが、僕自身のような役です。今、やりたい事を存分にできるのは決して「あたりまえ」の事ではなく、とても「ありがたい」事なのだということを、皆さんに伝えられたら本望です。とにもかくにも、このお芝居の9割方の時間は、ガハハ〜と大笑いしていただくこと意気込んでおりまーす♪\(^o^)



ウラ面。中面も見てね！